

## 大学図書館業務における機関リポジトリの位置づけ

酒井 麻里

近年、大学図書館を中心に機関リポジトリの構築が進んでいる。機関リポジトリとは機関内で生産された様々なデジタル資料を収集し、提供することを目的とした一連のサービスである。しかし、機関リポジトリは資料の種類、役割等、既存図書館業務とは異なる特徴を持つため、両者の統合が課題であると言われている。そこで本研究では、機関リポジトリ業務の実態調査を行い、大学図書館業務全体における位置づけを明らかにすることを目的とする。

図書館員の意識を詳細に知る必要があるため、調査方法はインタビュー調査とした。訪問先は国立大学2館・私立大学2館で、それぞれ規模の異なる大学にした。インタビュー対象者は機関リポジトリ業務を担当している職員と担当していない職員に分け、それぞれのグループに管理職クラスと係員クラスを含めてもらうよう依頼した。インタビューでは、機関リポジトリと関わり始めた時期、機関リポジトリに対する考え、業務内容、他の業務との関わり、今後の方向性について尋ねた。

その結果、まず、非機関リポジトリ担当者によって業務アクティビティの把握に差があることが分かった。機関リポジトリ業務の実態に関する発話からこの差は大学の違いから生じており、機関リポジトリ業務は大学図書館の組織の在り方に影響を受けていることがわかった。次に、機関リポジトリの機能に関する回答より、まず全大学図書館の非機関リポジトリ担当はリポジトリの機能を把握していることが確認された。これに加え、機関リポジトリ担当、非担当の機関リポジトリ機能の着目の中には、学部の傾向や学内資料の管理状況といったといった大学の特徴を踏まえている場合がみられた。このような大学と関連付けた機関リポジトリ機能への着目は、機関リポジトリ運営を通し図書館がそれぞれの大学における中核的な役割を担い続けることに繋がると認識されている。そのため、機関リポジトリ担当、非機関リポジトリ担当両者は共に機関リポジトリを通した活動を肯定し、今後も機関リポジトリ業務を継続していく意識があることが確認された。

本研究の結果より、大学図書館業務における機関リポジトリは現在、非機関リポジトリ担当の業務内容の把握という点では既存図書館業務と完全に統合しきれていないと言える。しかし、情報共有などリポジトリ業務の発達という点では既存図書館と同じく大学図書館組織や職員の影響を受け、統合された状態にいと考える。また、リポジトリそのものは各大学図書館職員によって肯定され、図書館の提供するサービスの一つとして位置付けてられていた。ここから、機関リポジトリと既存図書館業務の関係は今後も変化し、情報共有、連携を通した統合が進むと予想する。さらに機関リポジトリ機能に関する発話から、提供するリポジトリサービスの形は大学や大学図書館の特徴によって異なってくると考える。

(指導教員 宇陀則彦)